

## 「衣替えの季節を迎えて」

大本山總持寺単頭 柴田康裕

今年も六月に入り、衣替えの季節となりました。最近は季節感がなくなったと言われますが、この時期になりますと、ご本山も清々しい夏の香りに包まれます。

さて、数年前のことですが、ある男性が次のようなお話をされました。

「農村では、五月になると田打ちが始まります。一面に耕された田んぼの景色は実に美しいものです。やがてその田んぼに水が入り、代かきが始まります。一面に水のはった田んぼの景色もまた美しいものです。

ところが、水がはられた田んぼの中に、まだ耕されたままの田んぼが残っていると、それは美しいとは言えません。

さらに六月になると田植えが始まります。苗が一面に植えられた田んぼの景色は本当に美しいものですが、その中で、まだ植えられていないところが残っていると、たとえ水がはられていても、決して美しいとは言えません。

このように、それぞれの時期に、きちんと作業のなされた田んぼの景色は美しいと言えますが、少しでも時期がずれると、たとえ同じ状態であっても、美しいとは言えなくなるのです。」

私たちの服装も、これと同じように、それぞれの時期や場所にふさわしい美しさというものがあります。そこをわきまえないと、たとえ同じ服装であっても、かえって見苦しいものです。ですから、衣替えの時期に、きちんと夏の装いに改めるということは、美しさという観点からも大切なことなのです。

また、衣替えには、それまでの生活の流れを変えるという意味もあると思います。いつも同じような繰り返しの中で、何となく新鮮さを失っていく時に、衣替えを通して、再び瑞々しさを取り戻すのです。

『法句経』の中に、「流れを断て。勇敢であれ。」というお示しがございます。

新型コロナウイルスにふり回された生活の中で、知らず知らずのうちによどんでいた流れを、衣替えをきっかけとして勇敢に断ち切り、爽やかな気持ちで、今日というかけがえのない一日を過ごしてまいりたいと思います。